
よこしまサクラな大戦

神代ふみあき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

よこしまサクラな大戦

【Nコード】

N1565V

【作者名】

神代ふみあき

【あらすじ】

サクラ大戦原作前に「よこっち」を突っ込んでみたら、別物になってしまいました。

混ぜるな危険、その言葉の意味を実感したものです。

01 流星のような男（前書き）

好評であれば、時間を見て書き進めたいと思います。

とりあえず、出来ている分だけでも、さくさくアップ予定

01 流星のような男

それは流星のような男だった。

けったくそ悪い書類仕事に飽きて花見に来たときのこと、巷で噂の事件に出会った。

その名も「怪蒸気」。

人型の自動人形が、人様に悪さをするつつ事件だった。

拳銃はきかねえ、砲弾も何のその。

蒸気自動車や路面電車をなぎ払う怪力。

畜生、こんなときに「あれ」を持って来ちやいねえ！

奴らもまだ集まっちゃいねえし、あれもまだ試験段階。

くそ、まったくどうにもならねえ！

せめて、俺の霊力が使えれば・・・。

そんな後悔の中、一人の男が躍り出た。

無様によける、滑稽に避ける。

しかし、攻撃のすべてを集めて避け続けてる。

走り、とび、そして挑発し。

周辺に散っていた怪蒸気たちも、いらだたしく集まってきた。

「くそー、この怪物はだれんだー！」

どうやら誰かの持ち物が暴走していると思っっているらしい。

「誰のでもねえ！」

「だったら壊しても文句言われねえかぁ！？」

「それこそ、賞金がでるぞお!!」
「よっしゃーーーーー!!!!!!」

人間の限界を超えるかのように飛び跳ねた男は、桜の木の上に飛び降りた。

そして、きらめく光を、霊波の輝きを両手に込めて、怪蒸気たちに飛びかかった。

周囲の人間は死んだと思っただろう。

しかし俺にはわかった。

あの輝きは霊波の輝き。

あの霊波はすでに神剣にまで高められた霊波だ。

あれがあれば、容易にたたき伏せられるだろう。

その予感に逆らわず、男はすべての怪蒸気をたたききつた。

あまりの勇猛さに逃げるのを忘れてみていた人々は歓声を上げ、彼をほめたたえた。

集まる民衆にてれながら、男は一言いう。

「あー、じつは三日ほどなにも食べてないんで、何か分けてくれない?」

爆笑の渦の中、男を中心とした宴会が、上野の山で始まった。

俺はちゃっかり男の隣を陣取って、さも関係者かのように振る舞いつつタダ酒をせしめるのだった。

夜も更け、何のあつまりだか解らなくなっていた頃、男は隣の俺に声をかける。

「なーじいさん。」

「ん、なんだ？ 小僧」

「じつはさ、おれ、ここがどこだかわかんねえんだけど、教えてくれねえ？」

「ん？ 帝都だよ帝都」

「帝都？」

「おめえ、帝都もしらねえでこんなところまで来たのかよ？」

「んー、そうかー。」

「そんな田舎もんじゃあ、そら困ってるんだろ？」

「じつはさ、こっちもじじい一人抱えて、けっこう困ってたんだよなあ。なんか紹介してくんね？」

「いいぜ、おめえさんみたいなおもしろそうなやつを探してたんだよ」

そう、予感だった。

この閉息的で時間不足でにっちもさっちもいかねえ状況をひっきりがえしてくれるような、そんなおもしれえやつを探していたのだと気づいたのだ。

「俺の名前は 米田だ。」

「横島、横島忠夫っす」

この握手が、後の帝都防衛、霊的世界防衛の要になるとは誰も信じなかっただろう。

だから、アヤメ君、そんなに鬼みたいな目で見ないでくれんな？

支配人が連れてきた男性二人と女性一人、いいえ正確には、少年一人、老人一人、自動人形一人は、恐ろしいほどすごい人材だった。まず老人。

自称1000歳の欧州人であり、オカルト科学魔神だった。

その彼が作った自動人形「マリア」は、明確な自意識を持っており、蒸気演算期の数十倍の演算能力を持っている。

我々の「霊子甲冑」の問題点や改善点を即座に指摘し、そして改良にも加わってくれていた。

三色堇から改良された「綾武」の試験運用においても蒸気式から電力式への改良は実施され、霊子蓄電器の開発も平行して成功していた。

あわせ、動力の大半を蒸気で補っていた帝劇も電力化が進み、機関制御部の縮小と整理が進んでいる。

すべては欧州人、ドクトルカオスのおかげであった。

この快拳を思えば、時々痴呆状態になったり、信じられないミスをすることなど目をつぶれる、そう信じる。

その点、少年、横島君は、横島忠夫君は、かなりおもしろい子だった。

大工仕事から水周り、機械修理やら経理処理やら、何でもかんでもできるのだ。

帝劇の表の工事はもちろんの事、裏の工事についてもカオス氏の知り合いという事もあり、非常に息のあった調子であった。

が、彼の特質すべき点はそこではない。

いまだ上層部への報告もしていないが、彼自身の力が強すぎるのだ。

怪蒸気事件の時に見せた、物質レベルまで圧縮された霊気の刀やそれを変形させた盾、そして鉤爪のような小手。

すべては彼の霊力によるものだった。

はなやしきの調べでは、設計計画されている霊子甲冑「光武」の

出力と同等であり、神世の力だという計測値まである。

独力で怪蒸気を倒しうる靈力に加え、他人の靈力も励起させる事ができるのも恐ろしい。

三色堇の暴走時、彼女の靈力暴走を押さえたばかりか、その後の治療まで行い、加えて的確な訓練指針まで打ち出したんだ。

その効果は演算器で示された結果を遙かに上回り、堇自信の靈力の上昇まで促した。

確かに今は延びる時期だ。

しかしその伸びは常識を遙かに越えるもので、我々の光武計画自体の修正を必要とされたほどだ。

彼の靈的訓練の成果のためか、あのすみれが極めてよく懐いた彼、横島忠夫は困りがおだ。

自称女好き、三度の飯より美女が好きと語る彼が、私に迫ってくるのはいいのだが、それをスミレが見て焼き餅を焼き、私に対抗してくるのは困る。

ほら、ね、すみれ。

彼は年上のお姉さん好きなのよ、ね。

ほら、今も言ってるわ。

「わ、わいは幼女好きやあらへんのや・・・フンワリ柔らかいとか、体温高いとかおもっとらんのや・・・」

「・・・そろそろ落ちる寸前ですわよ？」

あらあら、これはまずいわね。

というわけで、ちよつと誘惑。

「つくは、あ、あやめさん、そんな恰好をするって事は、もう、許可なんすねえー！！！！」

もちろん不許可。

スミレと二人でボコボコにするのでした。

「理不尽だ――――！！！！！！」

あー、もう、ほんとに楽しい毎日ね。

01 流星のような男（後書き）

えー、この「本作」には、「大神君」は出てきません。
「大神ちゃん」は出てくるかも？

02 乙女の誓い、死が近い

霊能を、霊力を、一定の訓練で強化するなんて事ができると思わなかった。

それも、こんな不真面目でいい加減で女好きでダラシナくて・・・

強い人だったなんて。

初めて会ったのは、三色堇の機動実験の時。

高度な霊能者の男が来るというので、その鼻をへし折ってやろうと思っていたのだ。

まず初対面で顔を罵倒し、性格を罵倒し、そしてその雰囲気罵倒してやった。

あいつは「なんやねん、なんでここまでいわれにやなんのや！」って情けなく泣いていた。

そんな姿を見てスツとした私は、三色堇の機動を見せて最後の鼻をへし折ることにした。

最初は順調、途中経過でも順調で、過去最速で臨界まで持っていたのに、男は興味なさそうだった。

あまりの屈辱に更に力を込めたのがまずかった。

霊子力発動器が暴走したのだ。

無限に引き出される霊力、加速的に増幅暴走する霊波。

実際の機器まで破壊し始めて、私は焦った。

制御機器破損状態で進行すれば、私の身すら危うい。

でも、この中で一番の霊力者は私。

自分を助けられない私。

もう、おわりなのか、そう思った瞬間に、私の額に何かくつつく。瞬間、私の体から霊力が止まった。会わせるように私を横ダキにした誰かが三色堇から離れた。

呆然として見上げたその顔は、先ほどの情けない男。

いえ、情けない仮面を脱ぎ捨てた男。

冷静に状況を見極め、私のチャクラに干渉して霊力を止め、そして機器暴走を止めた男。

「すみれちゃん、力はいつも全力じゃあかん。二・三割の安全幅をもたせんと、暴走してまう。きいつけなあかんで。」

にっこり微笑みながら私をおろす男。

いいえ、男性。

「あ、あの、お礼を言わせてくださいませんか？」

「あ、ええって。俺は美女美少女の味方やからな」

「そ、そ、それでも、お礼を言わせてくださいませ。ありがとうございます」

「ん。」

嬉しそうに微笑んだ彼、横島忠夫との出会いだった。

米田のおじさまのご紹介だった彼は、霊能の修行に関する先駆者で、かなりの実力だという。

そこで私や他の訓練性の訓練を頼んだところ、信じられないほどの伸びを見せつけられました。

「いままでスミレちゃんたちは、大きな力をふるうことができる大男みたいなもんだったんだ」

つまり、その力の使い方やふるいかた、明確な力の使い方覚えれば更なる高みがあるというのだ。

これを力の効率化というそうだ。

加えて霊能自体の出力を上げることでもあるそうだが、それには生死をかけた訓練が必要だそうで、実践でもないのにそこまですることはないとのことだった。

横島さんのお話はもっともなんですが、それを押して爆発的な力を得たい私は食い下がると、何ともいえない表情の横島さん。

「ええか、スミレちゃん。女の子が求めるのが力だけであつてはあかんのや。守る想い、守る愛がなけりゃあかん。」

大切なことを言うとき、横島さんは関西の方言を使う。

訳を聞くと、恥ずかしいからだそう。

本当におもしろい人ですね。

だから、ずっと側に置いて上げましょうかしら？

非蒸気型霊子甲冑「光武」の非検者が決まった。

マリアⅡタチバナ

カンザキⅡスミレ

キリシマⅡカンナ

イリスⅡSⅡV

リⅡコウラン

五名を一部隊とし、戦略行動や戦術行動実験、そしてもう一つの訓練も行われた。

帝国陸軍対降魔部隊、帝国華撃団花組。

その仮の姿の訓練だった。

「なるほどねえ、神楽音曲で地霊を慰撫するねえ……。」
「なかなかだろ？」

「いやあ、もうちつと年嵩がうえでもいいんじゃないっすか？」

「そりゃだめだ。」

「なんでっすか？」

「あのぐらいいの子たちしか霊力の高まりはねえ。」

「……くそー、なんで年上っばいお姉さん増えないんじゃあ……。」

「ばーか。あのアヤメくんがスカウトしてくるんだぞ？自分の被るような娘を連れてくるあけねえだろ。」

「くがぁ……、そんな殺生な……。」

『あら？ おふたりさん。ずいぶんお暇そっね？』

振り返らずとも解る。

二人にとっての夜叉がいるのだから。

「あ、あはははは、ヨネじい、おれ大工仕事があるから」

「な、横島、逃げるな！」

「あばよとっつぁーん」

疾風のように逃げ出す横島。

「……ふふふ、横島君には、少ーしだけ時間を上げるわ。」

「わ、わしには？」

「即実行」

「……ぎゃわーーーーーん！！」

激しいダンスレッスンに集中していて気づかなかったが、その声は劇場内に響いていた。

そう、帝国劇場に。

その声を聞いて、自分の運命を知った横島は震えるのであった。

「（くそお、ヨネじいの誘いに乗ってレオタード鑑賞なんかしなければよかった……。）」

どこまで行っても横島であった。

03 東北夢紀行（前書き）

東北といえば、「あれ」です

03 東北夢紀行

急な盛岡出張ながら、古式ゆかしい汽車の旅を喜ぶ横島。

カオス謹製のクッションのおかげで、至極快適だったのは宇都宮まで。

気づけば周囲から不穏な靈気を感じた。

魔族や妖怪と言うものではないけど、それに近い人ならざる物の気配。

殺意とかそういうものではなくて、穏行がうまくいかずに漁っているみたいな感じだった。

視線を送ってみると、不自然に隙間のある網棚。

そこで隠れているのだろう。

だから横島はそれを投げ込んだ。

輝くことないその球がそこに入った瞬間、気配が消えた。

これで安心できるな、寝られる寝られる、と安心した横島だった。

もちろんこれで終わらないのは横島クオリティー。

もうすぐ盛岡駅というところで指に痛みを覚えた。

それで乗り過ごさなくてよかったのだから何が幸いするか解らない。

急いで身を起こしてクッションを畳むと、なぜか頭の上に狐の子。先ほど噛んだのは、この子らしい。

気配からして、先ほどの「隙間」らしい。

無賃乗車かいな、とつぶやくと、うれしそうにぺしぺしっぽで

叩く狐の子。

まあいいか、と笑いながら、トランク片手にコートを羽織る。
止まった列車から降りると、セムシ男思わせる男性が「真宮寺」
の家紋を振っていた。

どうやら彼が迎えらしい。

「帝都の横島さまですな？」

「はい、お世話になります」

「では、おのりくだせえ」

指し示された先には蒸気自動車があった。

どうやら行く先に舗装路を期待してよいようだ、と横島は安心した。

そう、安心してしまったのだ。

「ここからは階段になりますけえ。」

見上げるばかりの階段に内心冷や汗をかく横島。

「都会の方にやあ、きびしいですかねえ？」

試されていることを感じた横島は、にやりとわらう。
最近貯まるばかりのストックを解放してみよう、と。

「ま、そうですね。さすがにちょっときついんで、反則しますね」

そう言いつつ、片手で握る二つの球。

「子ぎつね、つかまってるよ！」

浮かべた文字は「飛・翔」！

横島はまるでハヤブサのように空をかけた。

男は度肝を抜かれた。

まさかこの階段にひるまず挑むどころか飛んでしまうなんて。

全く自分の目が信用できなかった男だが、事実は事実として受け入れつつ、どうしたものかと思案した。

すでに行ってしまったが、この階段のつく先が目的地ではないのだ。

いや、最終的な目的地ではあるが、すべてすっ飛ばした最短コースすぎたのだ。

ゆえに男は悩む。

なんと言いつくしようかと。

横島が飛び上がった先、山門の上におり立つと、そこでは一人の少女が木刀をふるっていた。

ある程度霊気のこもった検筋で、GS試験の一次あたりは通るかもしれないと思わされた。

が、それも一瞬で、漲っていた霊気は霧散した。

集中力の問題か、はたまた？

深いため息とともに座り込んだ少女の元へ子ぎつねが寄っていた。

築いた少女が抱き上げて頬を寄せる。

「ねー、狐さん。聞いてくれる？」

「きゅー？」

「あのね、実はね、あたし、今度上京するらしいのよ」

「きゅー」

「でもね、それには条件があつてね……」

「きゅ？」

「ふふふ、狐さんにはわからないかな？」

子ぎつね相手に悩みを話す少女だったが、自分の行為自体を愚かしんだようだった。

「まー、悩みなんつうもんは、本人にとつちや生死を分けるほど大きいもんだよ」

突然聞こえたその声が、まさか狐から聞こえたのかと思った少女だったが、背後の山門に人影をみた。

それは、すらっとしたコートを着た男性。

月を背にして佇む姿は、まるで講談の一場面のよう。

そんな男性が、まるで紐に釣られているかのように舞い降りた。

「悩みの大半つうもんは、誰かに話すことだできた時点で半分解決しているって聞いたことがある。」

旅行鞆を担いで歩く彼に、狐は飛びついて頭の上に乗った。

「ま、この狐にでも俺にでも、剣の師匠にでも、誰にでも話してみること。これがいちばん」

そう語った男に、少女は肩を落とす。

「私の師、父は幼い頃に・・・。」

「あー、そのー、すまん。おれってそう言う空氣が読めないことでもいつも仲間内から怒られてて・・・。」

「いえ、結構前のことですので、お氣遣いなく」

「いやいやいや、それでは俺の氣がすまない。なんかお詫びさせて出来ることなら何でもするから！」

瞬間、少女の心の内に奇妙な感覺が生まれた。

なんとなく、目の前の男を困らせたい、そんな思い。

「では、私が奥義を体得するお手伝いしていただけませんか？」

「ん、修行か？ いいよ。どんな技？」

「靈氣を高め、剣に集め、一刀の元に悪鬼邪靈を押し流す、そんな技です。」

私が知っている口伝を教えると、その男性はちょっと悩んだ後で一言行いました。

「やってみよ。」

その時のことを生涯忘れません。

男性が私の木刀を構えた瞬間、そこにお父様がいるかのように感じました。

そして上段に構えじつと目を閉じたまましていると、徐々にその靈力があがっているのを感じました。

まるで、本当に光が漏れ出すほどに。

その光はゆつくりと木刀に集まり、まるで光で出来た剣のようになりしました。

「それは靈気で出来た朝露の如し。」

握りからはの部分に靈氣が寄ります。

「それは靈氣によつて起こされる破邪の剣」

きゅつと握りを変えるその人。

「それは、人の世の邪惡を払う剣なり」

いつの間にか振り抜くと、そこには光の道が出来ていました。
舞散る靈氣はまるでサクラのよう。

「破邪剣征 桜花放神、これになる・・・ってね」

いままでの清廉さを吹っ飛ばすような笑顔。
今までの大人びた雰囲気吹っ飛びました。

「あ、あ、あの何で奥義が・・・。」

「ん？ ああ。木刀にこもった歴代の頭首が教えてくれたんだよ」
「え・・・。」

「君の木刀はね、何代も前から頭首が修行に使ってきたものなんだ。
だから心を研ぎすませば聞こえるよ、彼らの声がね」

「・・・すごいです」

「いや、ほら、まあ、うーん、そういうことで！」

掛け値なしの賞賛に居心地をどう感じたのか、少年のような男性はその場から去ろうとします。

もちろん逃がすはずがありません。

「弟子にしてください!!」

「やっぱりかー!!!!!!」

「ここまで見せといて、逃げるのはなしですよ!!」

「いやいやいや、俺も仕事でこっちにきてて、そっちの仕事が・・・」

「・・・その仕事が、サクラを鍛え直すこと、ですよ?」

突然の母の登場に驚く私だったけど、私はもっと驚いた事に出会った。

「落ち着いたところではなししませんか、お嬢さん!!」

「え?」

驚く私でしたが、もっと驚くのは飛びかかる男性を迎撃できた母。

「もう、米田閣下のおっしゃるとおり、昔の閣下にそっくりですね。」

それでもなぜか頬を赤らめる母をみて、なぜか敵だと感じた私でした。

03 東北夢紀行（後書き）

あっさり、というわけではありませんが、霊能格差は大きいみたいなこの作品。

04 太正桜と三途の川（前書き）

えー、原作をばきばきにしています。

原作以外認めないという方は、読まないほうが宜しいかと思ひます

w

04 太正桜と三途の川

霊波の流れと霊力の発現は別物かと思っていたが、どちらも同じ魂の力だと指導されました。

剣術に関しては皆伝えられているんだから、自分で昇華しろと冷たい横島先生でしたが、霊力に関してはきめ細やかな指導のおかげで恐ろしいまでの成長をしていると実感しています。

剣と一体化することで霊波の波を増幅したり、一気に放ったり出来るようになったのは、指導を受けて二週間ほどのことでした。今までどうやっても出来ないと思っていたこと自体が嘘のようです。

とはいえ、奥義をこんな霊力が低い状態で体得していいのでしょうか、と聞くと逆に聞かれた。

今の五倍ほど霊力を込めても威力は2倍程度。
そんなの使いものになる？ と。

横島先生の計画はもう少し先にあるものでした。
霊力が低い状態で覚えて、連発できるぐらいに自分の霊力容量を上げた方がいいというもので、確かに一撃必殺の攻撃の後動けなくなるなんて無謀もいいところでしょう。

でも、もっと威力を高めて、もっと精度を上げるとどうなるんですか？

「ん？ ああ、それぞれ。最終目的は、奥義の先の奥義の開発」

え？

「ほら、口伝でもさ、それなりに研究している奴らっているわけだ

ろ？　だつたらその奥の切り札を用意しておかないと、負けちゃうでしょ？」

確かに言っている意味は分かりますが・・・

「そんなに簡単に奥義など開発できるはずありません」
「諦めたらそれでオシマイ。あきらめる？」

彼の苦笑いの中に何かを感じた私はほえていました。

「……やります、やってみせます!!」

「よっしゃ、じゃあ、ちよつときつい訓練するからねー。一族会議を開催して、頭首が死んでも文句無いようにしておいてねー」

「え？」

「あ、大丈夫大丈夫、死なないように努力するし、死んでも魂が抜けてなければ蘇生できるから」

「え？」

「昔、300年幽霊していた子のしりあいがいてさ、その子が言うたよ『死んでも生きてられる』って。」

「ええええええええええええええええ！」

「じゃ、いつてみよーかー」

「き、きつねさ——んたすけて——!!」

「きゅ？」

わずか一週間で奥義のさらに奥に到達しました。

三途の川がどう言うところかについて詳しくなったので、大お婆さまといろいろ話しました。

「うんうん、横島先生のおかげで、死ぬのが怖くなくなったよお。」

「あはははは、寿命以外なら絶対に死なない自信が出来ました」

「サクラもつよくなつたねえ、主に根性が。」

「人生生きていてこそです。いきぎたなくなりました。あはははは」

けたけた明るく笑うサクラであつたが、何かを感じて簪を投げる。
そこには縫い止められた黒い陰。

「ふふふ、修行中でもないのに死神が来るたあどついうことかしら？」

縫い止められた陰は、ゆつくりと姿を現す。
その姿はまさに死神だつた。

「これこれ、サクラ。わしのお迎えじゃろ？」
「いいえ、このバカには見覚えがあります。」

そう言いながら、懷から何か出すサクラ。

「これ、よね？」

コクコクとうなずく死神。

「だめじゃないですか。これは勝負に勝った私が奪った戦利品。耶麻王だつて認めたことですよ。」

だー、つと涙を流す死神。

「じゃあこうしましょう。私が寿命で死ぬときになったらこれをお返しします。それまで我が家の守護をなさい」

期待に瞳を輝かせる死神。

「もちろん、台帳を書き換えた後が見つかったら、速攻で殺しますよ？」

激しくうなずく死に神から簪を抜くサクラ。

「では契約成立です。これに署名なさい」

胸元からだした契約書に喜んでサインした死神だったが、サクラが真つ黒な笑みを浮かべていることに気づきはしなかった。

それをみた老婆は、サクラが真宮寺の女らしく育ったものだと関心したのであった。

一月ほどの修行で見事奥義に達した真宮寺サクラは、一族のことを母親に任せ、一路帝都を目指すことになった。

「先生、よろしくお願いします」

「お・・・おう・・・。」

「ところで先生。」

「ん？」

「何で先生はヨレヨレなんですか？」

「ん、ああ、ちょっと鈍ってたんで訓練をな。」

「もう一つ質問です、なんでお母様がツヤツヤなんですか？」

「ん・・・、しらんなあ？」

「さらにもう一つ質問なんですが・・・。」

「さー、帝都が待ってるぞサクラ！」

「せんせー！ー！ー！！！！！」

走る横島、追うサクラ。

太正桜はロマンで嵐に……

「ふふふ、男の子かしら、女の子かしら？」

とりあえず、ロマンで嵐が危機だった！！

04 太正桜と三途の川（後書き）

・・・なんか、エロ同人誌のノリだったかも。

05 帝都の商魔（前書き）

ちよつと今回は長めです

05 帝都の商魔

「とりあえず、使えるようになったんだな？」

「まあ、いろいろとタフにしました」

「・・・ちよつといじり過ぎじゃねーか？」

「いやいや、あのスミレちゃんとカンナちゃんの間に入って生きていられるようにするにゃあ、あのぐらいじゃないと」

「まあ、たしかに生きてるがよお・・・。」

眼下のダンス練習風景を見てため息をつく米田。

「こえーだろ、あの力マ！」

「訓練中に居着いた死神からちよろまかしたんですけどね、結構使えるんで持たせたままにしています」

「し、死神だあ？」

「ええ、歴とした死神、それも耶麻王のお墨付きで持ってますよ」

「・・・おめえ、どんな人脈してんだよ」

「いえいえ、不肖の弟子が余りにも三途の川を往復するので、向こうさんから連絡付けてきたんすよ」

「サクラ何度殺しやがった？」

「死にそうでしたけど死んでませんって。」

「あのよお、あの娘は、本当に大切な娘なんだぜ？それをわかってるのか？」

「だから、ほかの子と別に、本当に死にそうで死なない訓練をしますって。ここまでの段階で一月って俺の方が死にそうなんすよ？」

横島の本気をみて、米田は考えを改める。

「するってえと、あの娘たちの中で唯一・・・。」

「唯一、絶対に死なないように教えました」
「・・・そうか、すまねえ。」

二階の客席から練習風景を見る横島の瞳は、どこか優しげだった。

「まあなんつつか、言葉もねえよ」

「そうですね、言葉ありません」

「おめえ、幼女趣味じゃねえんだろ？」

「美女美少女の味方っすから」

「「へへへへへへへへへへ」」

『じゃあ、私の味方、でもあるんですよね？』

瞬間的に散る二人の男。

一階から二人を狙撃するマリア。

衝撃で一階に転落した米田をタコナグリにする花組。

見事に銃弾をよけてみせたが、そのまま柱に激突して二階席に落ちる横島。

もちろん蹴りの嵐を加えつつ、恍惚とするあやめ。

そして、こちらもなんだか嬉しそうな横島。

そんな姿を見て、なんだかとてもとってもな気分になった花組が、蹴りの嵐に加わり、なんだかいつも通りになった帝国劇場だった。

どこに行っても、横島は横島であった。

第一回定期公演最終日、何度も通いつめた客、始めてみた客、すでに定期観覧券発売を求める客等々、ロビーはごった返していた。

その中で、横島はあらゆる手段で売店を切り回していた。

各女優の絵姿、講演記念広告、講演記念メダリオン。

もう、小物ばかりをバリバリ売りさばく。

制作当初は、会計からこんなものが売れるものかと罵倒されたが、それでも、自分お給料をつつこんでもいいからと言いつけて作らせた商品すべてが完売した。

後日、開場していないときでも制作できた時点で後追い販売するという約束まで取り付けてやっと客に帰ってもらったほどであった。その際、会計はどれだけつつこむかで論議となったが、今度は横島が数を絞らせた。

なぜ、と絶叫する会議会場で彼はこう言った。

「飢餓感をあおれば、次の講演の時にまた飛ぶように売れます」と。

その着眼点と開発能力から帝都の商魔と言われて久しい横島だった。

もちろん、彼自身の記憶に寄るところが大きいのだが。

そんな商品も完売し、歌劇の興奮さめやらない客が帰ったところで、打ち上げが行われた。

大道具小道具、演奏者指揮者、会場係事務係、そして女優たち。

みんな家族みたいなものだけに、みんなでお祝いと相成った。

仕事は違うしすれ違うことも多い人々だが、講演という一つの事柄に関わった事実と、成し遂げたという充実感はひとしおで、誰もがその事実酔っていた。

「よー、よこしまあんちゃんごくろうさま！」

「よこつち、よくうつたなあー」

「あ、あれあれ、姿絵、俺もほしかったんだけどなあ……」

「だれのだよ」

「マリアさまにきまつてんだろ!？」

「何言ってるんだよ、スミレ様だろ？」

「いやいや、カナナちゃんだって」

「コウランちゃんをわすれんなよ!!」

「サクラちゃんって危険なかわいさじゃん？」

「おまえら、かわいさでアイリスちゃんをこえられるとおもうな！」

なんだか大道具衆は大盛り上がりであった。

もちろん、自分の名前を呼ばれた女優さんたちも悪い気はしていない。

自分の名前がでると、ちょっと胸を張ったりしてしまうのは可愛いことだろう。

いつも冷静沈着なマリアですら、少しだけ、本当に少しだけ嬉しそうだから。

小道具も演奏者たちも巻き込んだ女優の好み争いの中、何故かそれに加わらずニコニコしている横島。

そんな横島をみて、何となく落ち着かない女優組。

それと無く、誰の絵姿が好みか、聞いてみようと言う話になる。

当然、隊長であるマリアは止めるのだが、気にならないわけではない。

こっさりこっさり距離をつめて、そして取り囲んだ。

それは、ほら、こっさりどころではない。

「……………いったい誰が一番?」

きょとんとした顔の横島だったが、懷からそれを取り出して言う。

「次回ロットから絵姿じゃなくて、カラーフォトグラムじゃーー」

「……」

懐から出されたそれは、不燃性のフィルムで密封されたフォトグラフで、絵姿と同じような構図だったが、鮮明さが段違いだった。各の女優を回覧した後、みんながそれをのぞき込んで歓声を上げた。

今度こそ買う、いいや、多めに作ってくればその分買う、館内に作れ、身内に蒔きたい等々など、それはすごい勢いだった。

大いに盛り上がる身内に対して、米田は謝った。

申し訳ないが安売りできないのだ、と。

今回でわかったが、この商品は帝国劇場の切り札となりうる商品で、これを材料にある程度の無理が政財界に利くようにするだろう、と。

だから、数を出回らせるわけにいかないし、身内だからと配って回らせるわけにはいかないのだ、と。

ちょっと意気消沈した周囲に、笑顔で言う横島。

「たださ、お客さんとは一線画した試作品は身内に出回るんだなあ？」

そういつて周囲に配り始めたのは、一式の写真。

練習中だったり、発声練習中だったり、休憩時間のお茶中だったり。

完全に心を許した人間に向ける笑顔の彼女たち。

それをみて、誰が撮影したかをしる男たちは、嬉しいけど悲しいみたいな顔でよこしまを殴るのだった。

カオス師匠と横島兄さんは、信じられないほど先に行った霊能科学者だった。

このことを言うと、二人とも苦笑いで否定するけど、その成果である「マリア」はんはうちの知識で制作は不可能だった。

隊長はんと同じ名前で混乱するかと思っただけど、何となくうちは隊長はんを「マリア」とは呼べへんかったから、そういう風に使い分けられた。

表情機構の少ないマリアだったけど、私には、いや、師匠や兄さんにもわかるみたいで、彼女に感情があることは明白だった。

その感情の元について、感情についての呪式について質問するとカオス師匠はいう。

「お主等の霊力と同じじゃ。魂から発生するものなんじゃからな。」

儀式と霊力と言霊で設計された「人工靈魂」が元となり、思考と感情を持ったアンドロイド「マリア」。

横島兄さんの話やと、カオス師匠の昔の良い人が原型らしい。

「うちもメカに呪式を組み込むべきやるか？」

「んー、紅蘭は、いままでの技術とその自信があるんだよな？」

「ん、せや、兄さん。確かにこの帝劇やと蒸気機関は時代遅れ扱いやけど、今まで積み重ねてきた技術的安心と常識の壁はまだ厚いんや。その基礎がなくて新技術はあらへん。」

「そうだよな、だから新技術が安定して誰にでも使える技術になるようにすることは必要だけど、それを無理して使うことはないんじゃないのか？」

「目から鱗や。」

確かにその通りや。

試験開発や研究開発はうちのしごとやあらへん。

その基礎研究の結果から大きなものを作るのが、うちの仕事や。

「そついうのが技術屋のしごとってやつだろ？」

「せやな、せや！　さすが兄さんわかつてる！」

うれしさの余りにうちが抱きつくと、兄さんは自分の両手の位置に困っておった。

女好きで美女に飛びかかる野獣を自称しとるけど、こちらがこうやって接近すると困ってしまう奥手はんでもある。

このチグハグなところが可愛いんや。

横島さんに光武はない。

実際にはいない、だ。

強力な霊能と霊力を持つ彼には、光武が邪魔なのだ。

現に、私たちが展開して追いつめても、罨を張り、闇所から攻撃し、分断し、個別に撃破されていった。

はじめは卑怯とスマレとカンナは叫んだが、正々堂々とする敵などいないことは私がよく知っている。

その点でみれば、横島さんのそれは十分訓練レベルで、殺傷を考えていないのが十分わかる範囲だった。

ただ、私たちの神経を逆なですることまで計算に入れないでほしい。

ええ、本気で腹立たしいですよ。

たとえば……

「そこお！！！！　スネグーラティカ！！」

「た、隊長！！　訓練や訓練や！！」

「だ、だめえ、マリアさんだめえ!!」

「よ、よこしまさん、よこしまさん、いきてるう?!」

「あーーーーん、マリアがタダオをころしたあーーーー!!」

と直撃したように見えたのに、縛炎が消えると、何故かそこには一枚の紙。

「はーずれ」

と書かれていたりする。

瞬間、安心した私たちだったけど、ビキッと何かのスイッチが入る。

「ちょっとまじめじゃないですよね、横島先生」

「そうですね、ちょっと真面目にしてほしいですわよね」

「あー、なんだ、真面目に腹たってきたな。」

「・・・兄さんの小細工は嫌いやないけど、ちとおいたがすぎるんじゃないやろか？」

「・・・せつかく心配してあげてるのに・・・。」

そう、本当に腹が立つのだ。

「・・・みんな、いくわよ」

「」「」「おう!!」「」「」

私たちの光武は、出力全開になった。

「で、何人いるんだ？」

「そうつすね、あと三人すね」

「指令、現段階で霊力全開です」

「・・・ほお、結構でるようになったじゃねえか。」

「でも、この状態じゃ、あと三人は倒せません」

「今のところは満足すべきか？」

「この状態で満足するには、もう一人いりますね」

「おめえじゃだめなのか？ 横島」

「・・・おさわり許可なら・・・」

「だめだ。」

「俺の霊力源知ってるでしょ？ 許可してくれたら・・・」
「だめだ」

訓練室の指揮所での押し問答は続いていた。

「・・・のぞきくらなら・・・」

「だめだ」

男たちの熱い戦いは続く。

もちろん、アヤメによるリンチが入るまで。

男たちは燃え上がっていた。

05 帝都の商魔（後書き）

というわけで、この辺までが一気に書けた内容でした。
以後は亀更新になります

06 いきなりのネタ割れw(前書き)

訓練をつみ、霊能を戦闘を進化させた花組。
その真価は、意外なほど早くに求められたのだった！！

06 いきなりのネタ割れw

実戦は突然だった。

上野に発生した怪蒸気集団に帝都市民が脅えている。

そんな中、彼女たちが現れた。

高周波音をなびかせて、大地を滑るように走り抜ける六体の動甲胄。

六色のそれが駆け抜けると、怪蒸気は爆音をたててはじけ飛んだ。

あまりに爽快な様に、あまりの快進撃に、帝都市民は逃げるのを忘れて歓声を上げた。

唸るが如くに長刀を操る機体、這うが如くに刀を操る機体、流れるように脚手で敵を討つ機体、そして神技が如きに銃弾をたたき込む機体、後方から火筒をたたき込む機体、そして電光石火の移動速度で翻弄しつつ敵を攪乱する機体。

すべての機体が踊るように舞うように敵を叩き伏せてゆく。

それは夢幻のような光景でありながら現実を伴う事実だった。

硝煙の香りすら幻想に感じるほどの活躍に、市民たちは酔いしれていた。

「あれは、なんだ？」「あれは誰だ？」

一連の舞踏のような戦闘が終わった瞬間、それらはポーズを取る。

「」「」「帝国華撃団、参上！！」「」「」

まるで舞台劇のようなその姿に、市民たちはいつそう盛り上がる。拍手が声援が渦巻く上の野山であったが、瞬間的な雷鳴が走り、一力所に落ちた

「ふははははは！　よい動きだな、帝国華撃団とやら！」

胸を張るその男に向けて、緑の機体が猛烈な勢いでミサイルを放った。

放たれた男は、必死によけて抗議をの声を上げる。

「・・・き、きさまら！　名乗りぐらい上げさせろ！！」

すみれとカンナによる追撃も加わり、生身のまま汗だくでよける男。

横島を追うことではなれているせいか、生身の人間相手でも容赦な

い二人だった。

「紅蘭、合図とともに追撃」「了解や」

「マリア、エンフォードで狙撃」「わかりました」

「サクラ、奥義連射」「・・・えっと、生身の人間ですよ？」「やらなきゃお仕置き」「さーいえっさー！」

無線での指示にうなずく三人は合図を待った。

「すみれ、カンナ、はなれろー！」

「了解！」

ぱつと散った二人のタイミングに合わせて、遠距離攻撃の雨嵐が男に降り注いだ。

「アッーーーーー！！！！！」

攻撃が終わったあたりでみると、爆煙の中心には尻をつきだして真っ黒になっている男が一人。

「よっしゃ、わいがトドメや。秘技、三年ごろし！！！」

両手で作られた、呪術的形状の「それ」がふれるかふれないかという瞬間に男は飛び上がった。

「っ！　させはせん、させはせんよー！！」

「くそ、この腐れ色男め、死にさらせ！」

輝く光の剣を掲げた青年が、黒こげの男に切りかかるが、まるで剣劇のように打ち合うことになった。

「くそ、この非常識男！ 戦うものの誇りは無いのかぁ！」

「やかましいい！ 明らかに怪しい黒幕ッポイバカが出てきたんだから、集中砲火にきまっとるやろが！」

実際はきわめてすばらしい武術の頂ともいえる技量の応酬なのだが、二人の発言の情けなさを感じさせなかった。

「せめて、私の戦闘準備が終わるまでまてんのかぁ！？」

「あほかっ、相手の準備ができていないところで集中砲火なんつうのは基礎やろが！」

さすがに卑怯かなーと思う市民や一部帝国華撃団であつたが、緑と黒は頷いていた。

「せやなー、相手の準備を待つ必要はないやろ？」

「当然ですね、うん」

そんなわけで、二人は周囲警戒しつつ、援護のタイミングを計っていた。

「くそお、出よ、闇神威！！」

ずびつと腕を上げた瞬間、男からちよつと離れた位置に黒と緑の攻撃が集中した。

「く、ああああ！！ なんで乗り込むまで待たん！？ 卑怯だろお！？」

市民も実はそう思っていた。

が、桃・紫・赤はダッシュで近づき、健在化を始めた自称「闇神威」をボコボコにし始める。

「このこのこの、蒸気式の旧型があー！」

「おほほほほ、間接発電式なんて怖くも何ともありませんわあ！」

「おしおきいやー……！」

名乗りも上げられず、愛機もボコボコにされた男は、半ば泣きながら撤退していった。

そのへたれた姿に市民は一応の喝采を送ったのだった。

帝国華撃団、その初戦。

あまりの容赦のなさとその強さで、帝都市民たちの関心を集めることになった。

「でも、ちょっと卑怯かも？」

卑怯上等、常勝無敗、帝国華撃団参上！

実は、かなり美神的な話であった。

上野の山の怪蒸気は、帝国市民にとっても頭の痛い話であったが、帝国華撃団によって打ち倒されたという事で、一種の祭りの状態に

なった。

岡屋台や夜店が建ち並ぶ中、一人の男が現れた。

「さーさー、よってらっしやいみてらっしやい、お暇な方は冷やか
しでもいいよお？」

ぱんぱんと手を叩いた男の前には、今帝都で一・二を争う話題の
一つである「大帝国劇場」の女優たちで有名になった「ブロマイド」
が並んでいた。

ただし、それは戦いの時の「帝国華撃団」のものだった。

「上野の山を守りきった「帝国華撃団」のブロマイド、怪蒸気よけ
に買ってかないかい！」

思わず殺到する市民たち。

鮮明な「ブロマイド」に感心しつつ、ちらほらと買い求め始める
者たちもいた。

「お、小僧もほしいか？ お父ちゃんにかつてもらい？ たばこを
一箱やめれば買える程度やからな〜」

おもわずドツと受ける市民たち。

そんな柔らかな雰囲気破るように、一人の男が現れた。

「男、この「ブロマイド」とやらを全てよこせ」

その男は、銀髪でソフトマッチョな感じだった。

「すみませんねえ、お客さん。多くの一にお分けしたいんすよ、
買い占めは勘弁してくださいませんかねえ？」

「金は出す、三倍でも四倍でもいい。全部よこせ」

ギンツと殺気を高める銀髪に、店主は苦笑い。

「だから、ダメだっけってるだろ？ 芦田」

瞬間、拳を振り抜いた男だったが、その拳は空を切り、店主はいつの間にか荷物の全てをまとめて居なくなっていた。

「き、きさま、なぜその名を――！」

混乱する市民の中心で叫ぶ男。

それをかなり離れたところで観察する店主、横島忠夫と月組隊員。

「横島大隊長、間違いありませんか？」

「間違いねーなー。ありや、魔族の写し身だ」

「真名は？」

「アシユタロス。魔界の大公爵だ」

「・・・！！」

息をのむ隊員だったが、横島は余裕だった。

何しろ写し身。本人と敵対したことがある身としては、何万分の一程度の力しかない写し身なんか毛ほども感じていなかった。

「・・・今、司令に情報を送りました」

「んじゃ、適当にあしらって撤退だな」

「大隊長、我々は？」

「市民の誘導と結界の形成。よろしく」

手にした書類を米田は落としてしまった。

内容に驚いたのもあるが、真名を看破した際に引き出された情報が、あまりにも重すぎたからだ。

敵の目的を考えれば、先の大戦、自分たちが行った降魔の封印など可愛いものだとしらおもえた。

「しかし、アシュタロス、かよ」

六大魔王が一人、未来と過去を見通すもの、その名の力を上げればきりがない。

そんな魔族が何で、何を目的に帝都争乱などに加わっているかはわからないが、明らかに異常事態だった。

現状、帝国華撃団で圧倒できる程度しか力がないが、本来の力が注がれた場合、力の差は19桁ほど違うとも書いてある。

写し身を叩いて本体の力を引き出してしまふ愚を考えれば、適当にあしらって拮抗していると思わせるのが肝要との方針報告は納得せざる得なかった。

「娘っこたちには聞かせられねえなあ・・・」

加えてもう一人の報告も目が離せない。

少なくとも切り札にすらなりうる情報だが、それに頼るのは自殺行為だった。

もう、帝国劇場ごと引きこもっていたいとすら感じる米田であった。

とはいえ、そうは言っていられない。

帝都の、ひいては帝国の靈的防衛こそが使命なのだから。

「くっそお、イヤになるほど有能じゃねえか、横島よお」

米田は苦々しくコップの中身をあおった。

いつもならば出る満足感は一切感じなかった。

初戦快勝。

ただし隊員たちにとって納得のいかない点を感じないでもないことがあった。

それが卑怯打ちともとれる部分。

花組の小隊長であるマリア・タチバナは、横島が指示した作戦の有用性を説明したが、感情的に納得がいかないらしい。

基本、一対一でガチ殴りあい愛する霧島カンはフテクサレているが、実はアイリスも不満に感じていた。

序盤はいいのだが、最後のところが「弱い者いじめ」みたいだったのが気に入らないと言う。

「そう、それだ！ あんなに弱い奴相手にタコ殴りつうのが気に入らねえんだよ！」

「マリア隊長、私も少し・・・」

あー、なんと説明しよう・・・。

そう思ったところで紅蘭が口を開いた。

「あんなあ、みんな。よく聞いてほしいんやけど・・・」

敵のあの男、ぜんぜん弱くないで、と。

「どういうこと、コウラン」

「あんな、サクラはん。うちの全力攻撃を集中的に受けて、ピンピンして逃げ回って、さらには霊子甲冑なしでウチラと戦える。どこに弱い要素があるんや？」

「・・・あ・・・」

彼女たちはそういう存在をよく知っていた。
加えて言うならば、その存在が如何に恐ろしいまでに強いかを。

「つまりや、横島兄さんを叩きつぶすつもりで戦わんと、倒せん可能性が高いっちゆうことや」

「・・・おおおおお」

なにげに撲殺系抹殺が決まってしまった瞬間だった。

一方そのころ。

数枚のプロマイドを眺め、ため息をもらす男が一人。

「うつくしい・・・この造形、この設計、この発想、この balan

ス・・・」

芦田と呼ばれた男は、恍惚と眺めているだけであった。

06 いきなりのネタ割れw（後書き）

えー、イキナリのネタ割れですw

で、ついでにネタ割れの追加。

- ・上野の山のブロマイド売り：月組の作戦行動。敵方が情報収集に来るであろう事を計算に入れた行動。意外な人物がつれたw
- ・横島大隊長：月組・風組・花組の戦闘部門を統括する役割を与えられている。加えて風組・花組が前線中隊。中隊長は秘密。
- ・芦田：神代作品におけるアシュタロスの漢字名w
- ・芦田2：この作品における光武の基礎設計者>魔改造された光武に惚れたw

こんなかんじですw

07 旗を継ぐ者（前書き）

よこしまサクラな大戦、おひさしぶりですw

07 旗を継ぐ者

第二回公演「孫悟空の冒険」は、はじめの脚本で蜘蛛女とのシーンをクローズアップされたモノから牛魔王のモノに差し替えられた。

これは真宮寺サクラのキャラが、かなりイケてる部分にのっかった変更だったが、ゲネプロを見る限りでは成功だったと言ってもいいものであった。

脚本家「横島忠夫」の誕生であった。

とはいえ、全員分の出番やら、それに合わせた新アイテムの開発などをしているあたり、商魔と呼ばれている面目も合わせている。

悪役という難しい役をこなしたサクラであったが、彼女のファンが減るかというそうではなく、逆に同性のファンや「格好良い悪役」に憧れる子供たちという癖のあるファンもできた。

故に、記念品売場で牛の角付きのヘアバンドがバカ売れな現状を見て、米田も舌を巻いていたのだった。

もちろん、孫悟空関連の、カンナ関連のアイテムも売れている。しかし、予想の範囲内で、これは爆発的に、とは言えない感もあった。

が、孫悟空シリーズ上演の際には何度も使い回せるアイテムなので、それもありか、という商品開発部署の計算もあったりなかったり。

思いの外バカ売れなのが「法師役着替えセット」だった。アイリス用の衣装だったので、縫製を調整して普通の子供だったら着られるようなコスプレセットを作ったところ、恐ろしいほど売

れた。

「というか、子供じゃなくても大きなおっさんも買って行っているのを見て、少しだけ背筋が寒くなったアイリスであった。」

「とはいえ、まあ、順調やな」

「そうですねえ、本当に毎回やってくれますね、横島さん」

「忙しいのは良いことやで？」

「というか、シンデレラメダリオン、再販してくださいよ。本気で泣きながら縋ってくるんですよ、いい年の紳士が！」

「で、椿ちゃんも、そんなおじさまにときめいて？」

「ときめきません。鼻水と涙でぼろぼろな紳士へんたいにトキメくほどハイセンスじゃないです」

記念品売場担当の椿とともに、明日の公演の準備をしていた横島は苦笑い。

記念メダリオンの価値が上がれば上がるほど直接取引の材料になるのだ。

そうそうに再販など出来ない。

逆に、熱狂的なファンの娘なんかを持っている貴族が、記念品を手に入れて帰宅した際の家庭内地位なんかを考えると、なんとか、親派にしやすい。

そう、引き入れやすいのだ。

財布として。

「横島さん」

「ん？」

「この記念品、なにに使うんですか？」

ひょいっと出したそれは、金属性の筒だった。
そしてその筒の先には、ガラス上の白いカバーがかぶせてある。

「ああ、これはな、人間の霊力、オーラなんかを呪符で発光させる
霊力灯や」

「・・・ええええええ！ そんなモノ売っていいんですかあ！？」

「簡単な呪符やし、京都の陰陽寮からも供給されとるし、緊急時の
手元明かりとしても政府公認やで」

「・・・政府まで動かししましたか」

思わず頭痛に耐えるような仕草の椿であった。

「で、どのぐらい霊力使うんですか？」

「んー、大して使わんぞ？ ふつうの赤ん坊が持つていても、一日
中使って・・・一晩寝れば大丈夫な程度」

「・・・それってすごい発明なんじゃないですか？」

「おう、どんどん広まってくれば、特許料がすごい勢いで劇団の
財布を暖めるんや」

うつわー、と驚きの顔の椿。

と、マリア＝タチバナ。

いつの間に、と、すこし驚いた横島。

「なんとうか、すごいモノ作りましたね、横島さん」

「ん？ まあ、光武の搭乗口にもついてるから、気にして見てくれ
や」

実のところ、光武の正面光源も同じで、電球でないので切れない、
その点だけでも現場使用上の優位点となっていた。

「で、マリア隊長は何か用かいな？」

「はい、横島さん。サロンでお茶会なんかしてますので、お暇ならご一緒にどうですか？」

暇なわけあるかいな、と思ったが、「いつてきてくださいね」という視線を送ってきた椿に感謝しつつ、その場を離れた横島だった。

椿にしても、この劇団の主戦力である花組のテンションを一定以上にすることも任務のうちなので、その辺に躊躇はない。

躊躇はないが、少し面白くもないのも事実なので、今度横島に洋食の一つでも奢らせようと思った椿であった。

その行為自体が「デート」であることを、彼女はまだ気づいていない。

「タダオー」

ちょこちょこと手を振るアイリスに微笑みつつ、横島は各自へ紅茶を入れる。

はじめはスマイレによる嫌がらせだったのだが、思いの外本格的に入れられることを知ったアイリスが「お茶はタダオー」と決め打ちし

たため、この時間には必ず呼ばれるようになった。

「しかし、横島兄さんも多芸やなあ」

コウランの台詞にカンナが乗る。

「ホントだよな。脚本は初めてにしても、大工仕事に格闘技、家事仕事に料理洗濯、本気で何やってたんだって話だ」

わいわいとお茶を楽しみながら、そんな話が続いていた。

「・・・実際、本気で元々の職業は何なんですか、横島さん」

真剣な、探るような視線に、横島は気軽に答えた。

「退魔士やで？」

「「「「「うっそだー！」「」「」」」」」

「いやいや、ホントだって」

GS、ゴーストスイーパーは、この世界でいうところの「退魔士」なので、絶対に嘘ではない。

とはいえ、この世界の「退魔士」は、かなり実力不足なので、元々いた世界のレベルでいえば「Dクラス」以下だろう。

霊力に秀でた存在であるという花組ですら「Bクラス」が平均であると言えた。

霊力全開でも「Aクラス」平均レベルであることを考えると、霊的な防御が薄いと言えた。

ゆえに、光武や戦闘服に呪符をかなりの密度で仕込んでいるのだが、今のところ彼女たちも気づいていない。

「横島さんほどの術者を、賢人機関が見逃すはずがないじゃないですか」

「だって、わい、男やし」

「関係ないで、横島兄さん」

そっか？ と首を傾げる横島。

「たぶん、賢人機関つうところも、目麗しい乙女ばかり探してるんやろ？　なにせ、目の前にや『美人さん』ばかりおるし」

「え」

真つ赤になる花組女子。

さすが横島忠夫。

意図せぬフラグを乱立させること森の如し！

「ね、ねえ、タダオ。それって、私も入ってる？」

「あたりまえやろ、アイリス。アイリスは超美人さんや。ブロマイド売り上げもトップやで」

真っ赤になりつつ目をウルウルさせたアイリスは、いやんいやんと身を振る。

「ま、女の子の子してるからなあ。あたしにや真似出来ね」

「そりやそうだ。アイリスはアイリス、カンナはカンナだろ？　アイリスの良いところとカンナの良いところは同じじゃない。だって、真似する必要はないだろ？」

「・・・横島さん」

ぽーっと赤くなったカンは、恥ずかしそうに頭をかく。

「たらしやな」

「たらしです、せんせい師匠」

「女の敵ですわ」

コウラン・サクラ・スミレの三人の冷たい言葉に不思議そうな顔の横島。

「・・・横島さん、実は前職は退魔士ではなく色事士だったのでは？」

「「「「「ああ」」」」」

「なんでやねん！」

何でも何もありやしない。

実際のところ、あと一步で落ちる女の数は星の数だったのだから。

07 旗を継ぐ者（後書き）

閑話チツクな七話、いかがだったでしょうか？
お楽しみいただければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1565v/>

よこしまサクラな大戦

2011年11月13日08時23分発行